

【暮らしの学び舎 Salmatt 企画】家庭科で育つ子どもと私の Well-being

第4回 20260718(土)10:00-12:00

2026 年度「暮らしの学び舎 Salmatt 企画」家庭科で育つ子どもと私の Well-being の第4回を7月18日(土)10時からオンラインで開催しました。工藤由貴子先生(東京家政学院大学)から、「今 家庭科の先生方に伝えたいこと」というテーマで、お話しいただきました。25名の方々が参加くださり、梶山曜子さんと中村誉子さんが企画の準備、当日の運営、進行を担当してくださいました。「家庭科で行う」から「家庭科を行う」への転換という重要な概念が提示され、ご講演後は、本質的な問いの立て方、教師自身の解放など、教育現場や教員養成の課題について活発な議論が行われました。プログラムは次の通りでした。

9:45~10:00(15分) 受付

10:00~10:10(10分) 趣旨説明、スタッフ紹介、前回の活動報告、Salmatt 企画趣旨説明、講演者紹介

10:10~10:20(10分) 参加者自己紹介(全員)

10:20~11:20(60分) 講演「新生家庭科に向けて」

11:20~11:50(30分) 協議

11:50~12:00(10分) 諸連絡、アンケート、次回予告

講演「今 家庭科の先生方に伝えたいこと」の詳細内容は、別ファイルをご覧ください。概要は次の通りでした。

1. 次期学習指導要領改訂の議論から 高まる子どもたちへの期待 広がる家庭科の可能性と課題の多さ
2. これからの“よりよい家庭科”への道「家庭科を行う」
3. 家政学の3つの総合性から導かれる家庭科教育の共通基盤
4. いったんのまとめ—ディスカッション

以下に要約を示します。

●自己紹介とライフコースを通じた家庭科との出会い

日本の家庭科の価値と教育の重要性について、海外での経験から家庭科の力が実感できたとのお話をいただいた。また、ご自身のライフコースを振り返り、家庭科の学びは各ライフステージで意味を変えながら繰り返し出会える特別な学びであると言ってくださった。さらに、自立の概念について、個人の主体性だけでなく、他者からの支援も含めたより包括的な視点が必要であると提案された。これらのことから、家庭科の教育理念を変えていくことの重要性を強調された。

●高まる子どもへの期待と家庭科のもどかしさ

次期学習指導要領の論点整理における「生涯にわたって主体的に学び続ける」「民主的で持続可能な社会の作り手となる」等々に示されるように、現在の教育システムは子どもたちに過度な期待を置いていることを指摘された。家庭科学習では、課題解決型のアプローチに転換する必要性が強調され、子どもたちが社会の課題に向き合い問題解決の能力を発達させることが重要だと述べられた。

●「家庭科で行う」から「家庭科を行う」への転換

現状の家庭科は、少子化・高齢化・デジタル化などの社会課題を分野別構造(家族・衣食住・消費・環境)の中に次々と入れ込む傾向があり、内容が百科事典状態になっていると指摘された。「家庭科で社会課題を扱う」のではなく、「家庭科の枠組み・方法論・内容論をもって社会課題に向き合う」という発想の転換を提唱してくださった。時間数不足・教員配置など制度的問題もあるが、根本的な考え方を変えなければ課題は解消されない。さらに家庭科の視点でしか見えない課題について子どもたちと考えることが重要であるとのこと意見をいただいた。「家庭科を行う」ためには、家庭科独自の枠組み・方法論・内容論の確立が必要ということでもあろう。

●家政学の総合性と共通基盤の提案

家政学の総合性として以下の3つを提示された。

1. 時間軸の総合性: 人間の一生を生涯発達のプロセスとして捉える(バルテスの生涯発達論を基盤とする)
2. 主体形成の総合性: 「あなたはどんな人になりたいか」を問い、それに基づき必要な知識・技術の習得を促す
3. 家族・コミュニティを一つの視野に収める総合性: 個人の問題を個人の責任に帰さず、新しいパートナーシップで社会的課題として解決する

この3つの総合性から導かれる共通基盤(ワールドビュー)として、①生涯発達の視点、②「とは？」から始める問い、③環境は変えられるという信念を全領域の授業でもちつづけ活用することが、子どもの生涯にわたる発達を促し、主体的で自立した人間になることにつながると強調された。すなわち、教育目標を個人の現在の状況に限定せず、人々が百年間生き続ける存在として捉えることの重要性を説かれた。

●小学校の授業への具体的な適用例

現行学習指導要領の家庭科目標には、「生活の方法を学ぶ」とことと「人生の方法を考える」ことの2側面が含まれており、この往還を意識した授業が重要と強調された。このような家庭科の授業を通じて、子どもたちが自分の生活観を発見し、より豊かで持続可能な生活を実現する方法を学ぶべきであると提案された。現行A領域「家族・家庭生活」の授業例として、家庭の仕事の分担を学ぶ前に「家族はみんな生涯発達する存在」という視点を共有すること、現行B領域「生活の中の音」の授業例として、「うるさい音をなくすルールを守ろう」ではなく、「どんな音がある地域が好きか」という問いから始め、環境を変える主体として考えさせることを提案された。消費・環境領域でも、節約・リサイクルの方法論の前に、「自分にとって・地球にとって充足した生活とは何か」を考える時間の重要性を述べられた。家庭科はエフィシエンシー(効率性)からサフィシエンシー(充足性)への転換を担う教科であり、子どもたちを社会の枠組みに縛るのではなく、自分の考え方で生きていけるよう解放することが家庭科の役割であることを強調された。

★講演終了後、工藤先生と参加者との間で活発な意見交換が行われた。

SSは、講演を通じて自分の中にもワールドビューがあることを確認でき、「間違っていない」と感じた。一方で、日々の授業では「これをやらないといけないからやる」という授業が多いことも実感したと述べた。生涯発達の視点と環境を変えられるという信念を常に子どもたちに伝えていきたいという意欲が示された。

HSは、高校生への家庭科の在り方を整理しようとしていたが、途中から自分ごととして聴いていたと述べた。50代になり介護に関わる自身の状況と重ね、時間軸・空間軸で家庭科を捉える重要性に共感したとの案層が述べられた。工藤先生から、家庭科教師は「教師」ではなく「人間」として子どもたちの前に立てる特権があり、自分のできないことや悩みをカミングアウトできることが家庭科教師の強みだとのお話をいただいた。HSは自分の中にある「強い自立」への固執に気づき、環境を変える視点をもてる教科としての家庭科の力を再認識したと述べた。TNは、教師の言葉の使い方・問いの投げかけ方次第で授業が大きく変わる。新学習指導要領でA～F領域に領域分化されても、教師が総合性のニュアンスをもって授業すれば家庭科の質が高まるのではないかと述べた。工藤先生から、どの授業でも同じワールドビューを持ち続ける「うるさい先生」になることが一つの総合化の体現だとの言葉をいただいた。家庭科教師による「生涯発達できる」という言葉の重みは、他教科にはない力があると強調された。TNは、家庭科は問いを生み出すことが得意であり、家庭科の視点で社会を見るとたくさんの問いが生まれると述べたことに対して、工藤先生から、問いに対する答えは一つではないが、絶対に間違っている答えや専門家として正しい見解は存在するため、それを示すことが授業の役割だと述べられた。

ASは、工藤先生の講演の「生活の方法と人生の方法の往還」という概念が非常に腑に落ちたと述べた。家庭科教師自身が一生発達していく人間として自分の生き方を見つめ、それが授業の中で「人生の方法」として子どもたちに伝わるのが重要と思うと述べたが、一方で、固定的な学習観や学校・家庭からの圧力の中にいる子どもたちに対して、「自分で変えられる」という授業をすることの難しさも課題として述べた。工藤先生から、子どもたちは学問として学んでいるのだから、自分の現実とは別の次元で「これは違う」と伝えることは大切だとのご意見をいただいた。

RK は、現場教員が概念化することの難しさを指摘した。個々の授業内容の指導法は工夫しているが、本質的な問いを立てる力が不足している。知識→認識→概念化のプロセスを子どもたちが辿れるような授業づくりが必要であり、パフォーマンス課題はその変容を見取るものだと述べた。また、前日に参加した小学校の授業で観た衣服の手入れの授業(エックスチャートで4つの立場からディスカッション)と、京大の石井先生との「子どもを解放する」「押しつけの主体性をやめる」という議論が、工藤先生の講演内容とシンクロしたと述べた。次回のカタリバでは、「本当の主体性とは何か」「本質的な問いとは何か」「子どもを解放するとはどういうことか」などをテーマに議論したいと提案した。工藤先生から、家庭科の授業における評価システムの課題について、現場の教師が多様な学習スタイルを評価することの難しさについて触れられた。RK は、実践的な経験を共有し、子どもの変容プロセスを評価することの重要性を強調した。KF も、家庭科の評価についての悩みを共有し、子どもたちの主体性を評価することの難しさを表明した。通知表の評価が子どもの主体性や成長を適切に反映できているか疑問を感じていると述べた。AS は、評価は必要だが教員の裁量の自由度は十分あると述べた。

YukS は、教員養成において家政学原論的な捉え方と各分野の専門知識を構造的に理解させることで本質的な問いを立てる訓練ができるのではないかという問いを提起した。日本の家庭科の「作り出す力」は、かつて女子必修でしっかり学んだ世代だからこそ身についたものであり、現在の授業時数で同様の力を育てられるかという懸念を示した。実際に手で触れ・感じ・味わう体験は、後々の生活感を形成する力をもつと述べ、体験の重要性を強調した。そして、作る・触れる体験は今後ますます意識的に提供しなければならない重要な学びだと述べた。工藤先生も、実践的な経験を重視し、子どもたちが手作りや感覚的な体験を通じて学ぶ重要性を強調した。

YumS は、家庭科は教師の人間性が表れる教科であり、それが強みでもあり大変さでもあると述べた。また、自律性・経済的自立の概念の難しさや、生涯発達を子どもたちにどう伝えるかという課題を提起した。工藤先生からは、若者が高齢者に無関心になっている現状を問題視し、「みんなが生涯発達する存在」という視点をもつことで人の見方が変わるとの示唆をいただいた。

★まとめ

工藤先生から、日本社会がライフステージで人々を切り分けていることへの問題意識が語られ、その枠を取り払えるのが家庭科の強みだという応援メッセージをいただきました。工藤先生から学んだ「強さ」を自分のアイデンティティとして大切に、発信していくことが重要だと思います。参加者全員が、それぞれの立場で、自分を(こだわりから)解放することが大事と感じた時間であったと思います。工藤先生、ありがとうございました。